

今年の一月二十一日の二十二時、僕のぼっちゃんの心臓と呼吸が止まった。ぼっちゃんが夜急に苦しくなり、父ちゃんが車で病院へ連れていくと中で止まった。近くの消防しょにかけ込み、きゅう急車に乗せてもらった。病院へ着くと、お医者さんが、ぼっちゃんを生き返らせてくれた。でも僕は、その時ねていたから、そんな大変なことが起こっているなんて、全然知らなかった。

朝になると、母ちゃんが

「おばあさんは、かぜで苦しくなって入院したから、また会いに行こうね。」

と、教えてくれた。ぼっちゃんは、何回も入院してるけど、いつも元気になってたい院していたから、今回もそうだと思っていた。三日たって、母ちゃんが

「おばあさんは、自分で息することも、話すことも、大ちゃんの頭をなでることも出来んよ。でも、お医者さんが、耳は聞こえるって言われたから、会いに行こうね。」

と話してくれた。僕は信じなかった。すぐに会いに行つた。三階の集中治りよう室に、ぼっちゃんはいた。

「ぼっちゃん来たぞー。」

とすぐく明るく入つた。でも、いつもと、あまりにもちがうぼっちゃんのすがたに、

僕は泣きそうになった。がまんした。ぼっちゃんの手をさすつて、

「ぼっちゃん、大だよ。わかる？ぼっちゃんのソーセイジ入りみそ汁が食べたいから、元気になってくれー。ケンカもしたいし、宿題も教えてよ。目を開けてよ。ぼっちゃん。」

と、声をかけた。そしたら、ぼっちゃんの右目から、なみだが流れた。

「ぼっちゃん、わかる？聞こえる？いつも、ありがとうつてなかなか言わんでごめんね。」と言うと、また右目から、なみだが流れた。僕はうれしかったけど、泣きそうで、ショックで、外へ飛び出した。

母ちゃんが、

「おばあさんは、何十年も朝から夜おそくまで働いてきたから、ねかせてあげようね。」と言つた。僕は、それでいいと思つた。僕はぼっちゃんが生きているだけであれしかつた。それだけで、ありがとうだつた。

僕が大人になる頃には、すごい薬や注射液が出来て、ぼっちゃんがきつと目をさますから、僕は毎年写真をとつておくよ。急に大人になった僕を見て、おどろかないように、いつ目を開けてもいいようにしておくよ。

だからぼっちゃん、安心してねてていいよ。僕は、ぼっちゃんが、起きた時に「ぼっちゃん、生きていてくれて、ありがとう。」

と、必ず言うよ。言わせてね。